

主 題：私の信条 4

聖書箇所：随所

主イエス・キリストを信じる信仰者ひとり一人の信仰を大変うまく要約したもの、それがこの「使徒信条」で、私たちはこの信条を通して「いったい我々は何を信じているのか?」、そのことをもう一度考える機会をもっています。

使徒信条 :

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて、生ける者と死にたる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえのいのちを信ず。 アーメン

すでに、「父なる神を信じる」「子なる神を信じる」を見て来ました。

- A. 父なる神
- B. 子なる神
- C. 聖霊なる神

今日、私たちが見ていこうとしているのは「聖霊なる神」についてです。たとえば、私が皆さんに「あなたは聖霊なる神を信じていますか?」と質問したときに、あなたがクリスチャンであるなら間違いなく「もちろんです」とお答えになるはずですが、もし、そうでなければ、その信仰を根本的に見直す必要があります。問題は「信じているかどうか」ではなくて「あなたが信じている聖霊なる神のことをあなたはどれだけ知っているか?」ということです。もし、「では、あなたが信じている聖霊について話してください」とお聞きしたなら、皆さんはどのようにお答えになるでしょう? 私たちが「神を信じる」と言いながら、もし、その神のことをもっと知りたいと思っていないなら、神に対するその愛に問題があると思いませんか? なぜなら、愛するならもっと知りたいと思うはずだからです。

残念ながら、私たちは「父なる神」について「子なる神」について学ぶことは多くあっても、「聖霊なる神」について学ぶ機会が少ないのが多くの教会の現状です。私たちはこの時間、私たちが信じる「聖霊なる神」はどのような神なのか、そのことを見ていきます。間違いなく、その方を知ることによってあなたの信仰に大きな力が注がれることを確信しています。あなたがより強い希望をもって生きる者へ変えられることを信じます。

☆「我は聖霊を信ず」 : 「聖霊とはどのようなお方か」について学ぶ

1. 真の神

先ず、確信をもって言えることは「この方は真の神である」ということです。聖書には「イエスの大命令」があります。マタイの福音書 28 : 19 「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、」、私たちはイエス・キリストの福音を伝え、救いに与った者たちをみことばによって訓練します。それが弟子を作るということです。同時に、私たちは救いに与った者たちに「水のバプテスマ」を授けますが、ここにあるように「父、子、聖霊の御名によって」と、「父、子、聖霊」が同列に並んでいます。

また、私たちの教会では余りませんが、礼拝の終わりに牧師が「祝祷」をするところでは、Ⅱコリント 13 : 13 「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。」、このみことばが引用されます。ここを見ても、「父なる神」「子なる神」「聖霊なる神」が同等に並べられています。少なくとも、ここを見ても「父なる神」が神であるように「子なる神」が神であるように、「聖霊なるお方」も神であるということを知ることができます。

ここまではもう分かっていることです。私たちはこの時間、もう少し聖霊がどうして神だと言い切れるのか? そのことを見ていきます。なぜなら、人々からもし「あなたは聖霊が神だとして言い切れるのですか?」と質問されたとき、あなたがみことばからしっかりと答えを引き出すことができるためにです。「だれかがそう言っていた」とか「教会でそのように聞いた」ではなく、「聖書がそのように言っているから」というのが私たちが目指す信仰の姿です。聖霊なる神について確信をもつために見ていきましょう。

○聖霊なるお方が神であると言い切れるのは？

1) 弟子たちの証言のゆえに

使徒の働き 5 : 3、4 をご覧ください。アナニヤとサツピラのことが記されています。二人が自分の土地を売って来ます。そして、その売ったお金を「これです」と持って来るのですが、残念ながら、それは真実ではありませんでした。みことばが教えるようにその一部を自分たちのために取って置いたのです。それ自体は悪いことではなかったのです。悪いことは、自分たちのために取って置いてその残りのものを使徒たちの前に差し出して「これがすべてです」と嘘を言ったことです。その様子が記されています。「:3 そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。」と、ペテロは何が起こっているのかを知っていました。神がご存じです。見ていただきたいのは、あなたは「聖霊を欺いて、」と言ったところです。そして、4 節はこのように続きます。「:4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。」と、正直に言えばよかったです。「なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」、ここでは「聖霊を欺いて」ではなく「神を欺いた」とあります。

ですから、ペテロ自身、聖霊がだれであるかをはっきりと分かっていたのです。「神である」と。弟子がこのように聖霊がだれであるのかを証しています。

2) ご性質のゆえに

同時に、みことばには聖霊なる神のご性質が記されています。それを見ることによって私たちは「確かにこの方は神だ」と断言できます。

(1) 遍在のお方 : どこにでもおられるお方です。ダビデはこのように言っています。139 : 7 「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。」、つまり、彼はどこに行ったとしてもそこに聖霊なる神はおられると言うのです。遍在は神だけがもつ属性です。被造物はもっていません。サタン、悪霊ももっていないのです。

(2) 永遠のお方 : ヨハネ 14 : 16 をご覧ください。この箇所は何度も見ます。イエスがいなくなると聞いて不安に陥っている弟子たちに対して、イエスはメッセージを与えていきますが、その一部です。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」、見ていただきたいのは後半の部分です。実は、この後半はある接続で始まっています。この接続詞を付けることによって、後半の部分は前を受けての結果を表すのです。つまり、「聖霊なる神を与える」と言われた、その結果どうなるのかということをお話しているのです。「その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」と、これが結果です。

「いつまでも」と訳されているこの名詞は「時代、永久、永遠に」という意味があります。ですから、言いたいことは、あなたがたに聖霊なる神が与えられる、その結果、その聖霊なる神は永遠にあなたがたとともにおられるということです。ですから、聖霊なる神は永遠から永遠に存在しておられるお方なのです。私たちのように始まりがあり終わりがあるのではないのです。すべての被造物は始まりがあり終わりがあります。でも、すべてのものを造られた神には始まりも終わりもないのです。

今、二つの性質を見ましたが、このことから確かに「聖霊は神である」と言うことができます。

(3) 主イエスの証言のゆえに : もう一度ヨハネ 14 : 16 を見てください。今度は前半の部分です。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」、この「もうひとりの」ということばに注目してください。このことばは「アロス」というギリシャ語の形容詞が使われています。実は、ギリシャ語の訳では「アロス」の他にもう一つ「ヘトロス」ということばもあります。日本語ではどちらも「もうひとりの、別の、その他の」と訳することばです。この箇所では「アロス」が使われています。なぜなら、主は敢えてこのことばをここでお使いになったのです。意図的に使われたのです。そのためにはそれぞれのことばの意味をもう少し詳しく知る必要があります。⇒「アロス」 : このことばは新約聖書中に 155 回使われています。これは「同じ種類の別のもの」を表します。たとえば、イエスはマタイの福音書 13 章でたとえを話されました。すでに見ましたが、良い麦を蒔いた。そこに敵がやって来て悪い麦を蒔きました。イエスはこのたとえによって何を教えられたのか？「天の御国」のことを言われたのです。13 : 24 - 25 「:24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。:25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。」、31 節を見ると「イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、」とあります。こういうことです。イエスはマタイ 13 : 24 からこのたとえを使って「天の御国」のことを説明しました。そして、31 節からは「別のたとえ」を使って同じ「天の御国」の説明をされたのです。

たとえば違いますが、別のたとえを使ってイエスが説明したかったことは「天の御国」についてでした。この「別の」と訳されていることばが「アロス」というギリシャ語なのです。別のたとえだが伝えたいことは「天の御国」だということです。「天の御国」とはどういうところか？どうすればそこに入ることができるのか？そのことを教えるのです。

また、イエスが弟子たちとともにいたときに、マルコ 4 : 36 「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。」、ここにある「他」ということばが「アロス」です。つまり、同じような舟でもイエスが乗っておられた舟と人々が乗った船は違うということです。ですから、「アロス」ということばを使ったときに何を意味するのかというと、同じ種類でありながら別のものをいうときです。

⇒「ヘテロス」：これは「全く性質が異なる別のもの」のことです。本質の部分が全く異なる別のものことです。イエスが十字架に架かったときに二人の犯罪人がイエスの両脇に架かっていました。ルカ 23 : 32 に「ほかにもふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。」とあり、23 : 40 には「ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」とあります。ここの「ほかにも」と「もうひとりの」ということばに「ヘテロス」が使われています。ふたりの犯罪人は全く違う人物です。彼らがどんな犯罪を犯したかは分かりませんが全く違うものです。

もっと分かり易い例は、パウロが自分の信仰者としての心の中の葛藤を表しています。ローマ人への手紙 7 : 23 をご覧ください。「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりにしているのを見いだすのです。」と、パウロは自分の中に「神の律法」と「罪の律法」が共存していると言っているのです。イエスを信じて救われていながら、救われる前と同じように罪を愛する気持ちがある、同時に、生まれ変わった者として神に喜ばれたいという新しい思いがある、この二つが自分の中に共存していると言うのです。このメッセージでパウロが言いたかったことは、「異なった律法」が存在している、「ヘテロス」の律法が存在している、全く性質の違うものが自分の中に存在しているということです。「罪の律法」と「神の律法」は全く相反するものです。その二つが自分の中にあるということです。

パウロはガラテヤの教会をととも厳しいことばで非難しています。ガラテヤ 1 : 6-7 「:6 私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるのではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」、彼らが正しい福音から離れていたからです。「ほかの福音」、「ヘテロス」です。「もう一つ別に福音」、これも「ヘテロス」です。ですから、パウロたちが語った正しい福音と偽りの教師たちが教えた「偽りの福音」は全く性質の違うものです。これを表すときは「ヘテロス」を使うのです。

確かに、見た目は違うかもしれないけれど、本質的に同じであると言いたいときは「アロス」を使い、そして、全く本質的に違う二つのもの、別のものを言いたいときは「ヘテロス」を使うのです。

それを踏まえた上でもう一度ヨハネ 14 : 16 を見てください。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」、この「もうひとりの」は「アロス」です。なぜなら、確かに、聖霊なる神とイエスは違うけれど、本質において同じだからです。敢えて、イエスは「アロス」ということばを使うことによって、「わたしが父なる神にお願いして送っていただく聖霊なる神は、確かに、見た目はちがうでしょう。…」、なぜなら、聖霊は「霊」です。形がありません。からだを持っていません。イエスはからだをもっておられます。「でも、本質においては同じです。」とここで言われたのです。ですから、イエスは「わたしがあなたがたに送ろうとしている聖霊は、私と同じ神である」と言われたのです。

神学者であるクランフィールドはこのように言っています。「聖霊の『聖』ということばは、私たちがここで神ご自身の霊、すなわち、ご自身が神であり、御父と御子とともにひとつである霊をここで問題にしているということ、私たちに銘記させたものである。」と。「聖」ということばを敢えて使っているのは、この方（聖霊）が御父と御子とともにひとつである霊、ひとつである神であることを明らかにするためだということです。

ですから、私たちが「聖霊」ということばを口にするとときに覚えておくべきことは、この方は父と子と同じ神だということです。これが聖書が私たちに教えていることです。このような神を私たちは信じたのです。

2. 人格をお持ちのお方

皆さん、「聖霊」、「霊」と言ったときに、からだを持っていないからどんな存在なのかと思います。初めに言ったように、「聖霊」について私たちは余り学んでいないとするなら、うまく答えることが出

来ないかもしれませんが。でも、聖霊は人格をもっています。私たちは「三位一体」と言いますが「三位」は「三つのくらい」と書きます。この「位」はラテン語では「パーソナ」です。これを訳せば「人格」です。でも、相手が神だから「人格」とは言わず「位格」と言うのです。つまり、神とはどういう性質をお持ちなのか、神とはどういうお方なのか、聖霊なる神を見ると私たちはこの方にどのような人格（人格ということばが使い慣れているのでそのように使いますが）があるのか？この方はただの風とか霊ではないのです。この方には知性があり感情があり、意志があります。

○聖霊なる神の人格を三つ挙げる

1) 知性をお持ちである

思考力があるのです。ローマ8：26、27に「:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。:27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」とあります。パウロがここで言いたいことは、私たち救いに与った信仰者は神のみこころに従っていきたくて祈ります。ときに、私たちはどう祈ったらいいのかわからないけれど、感謝なことに、内住する聖霊なる神が私たちのためにとりなしてくださいます。私たちが論理的に祈りを組み立てて、頭の中でよく分かる祈りをしたなら神はそれを聞いてくださるが、そのような祈りでないなら神は聞いてくださらない…、それは大きな間違いです。神は私たちの心をご覧になっています。

感謝なことに、内住する聖霊は私たちがことばにできなくても、彼が私たちの思いを知っているゆえに、私たちに代わって私たちのことを神にとりなしてくださいます。そういう働きをされるのです。知性があるゆえに私たちの考えていること思っていることを理解してくださるのです。私たちが一生懸命説明するから神が知ってくださるのではなく、説明する前から神は分かってくさっているのです。

2) 感情をお持ちである

エペソ4：30に「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」とあります。罪を犯して神に逆らうなら、神のみこころに背を向けて生きるなら、聖霊なる神が悲しまれると言います。また、旧約聖書のイザヤ書63：10に「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」とあります。「主の聖なる御霊を痛ませた」と訳されていることばは確かに「痛ませた」という意味もありますが、これは「悲しませる」という意味があります。そのことばがここで使われています。神が痛みを覚えたり神が悲しみを覚える、聖霊なる神はそのような感情をお持ちだと言います。

3) 意志がある

Iコリント12章にはイエスを信じたあなたに神が御霊の賜物をくださるということが書かれています。12：11「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おののちにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」と、この箇所が教えるように、聖霊なる神があなたに賜物をくださるのですが、「みこころのままに」と、つまり、聖霊なる神のみこころのままにあなたに賜物が与えられるのです。ですから、聖霊なる神には意志があるということです。ご自分がお考えになってご自分がベストということをお私たちに為してくださいしているのです。

少なくとも、「聖霊なる神」について私たちが考えるときに、この方は「真の神」である、同時に、この方は知性を持っておられ、感情もあるし、そして、意志をお持ちのお方である、このような存在だということを聖書は私たちに教えているのです。ただ何となく「漠然とした存在だ、漠然とした神だ」ではなくて、このようなお方なのだと言います。聖書は私たちに教えるのです。

3. 聖霊の働き

その上で「聖霊なる神の働き」について見ていきますが、九つあります。なぜ、これが大切かと言うと、こういう神があなたのうちに内住しているということ、そのことを知ることによって、願わくは、私たち一人ひとりの生き方が変えられていくことを望むからです。

1) 救いへと導く

人を生まれ変わらせる、罪人を救いへと導くという働きです。あなたがこの救いに与ったのは、神がそのように導いてくださったからです。イエスはヨハネの福音書3：6でこのように言われました。「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」と。ニコデモという宗教家と話をしていたとき、イエスはこのように「新しく生まれ変わることを」言われました。新しく生まれ変わらなければいけない、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ3：3）と言われたのです。ですから、イエスが言われたことは「肉によって生まれた者は肉です。」と、つまり、普通に生まれて来た人は肉の状態であって、肉の状態にある人は永遠のいのちに至ることはないと言われたのです。

では、永遠のいのちに至るために何が必要か？「御霊によって生まれること」です。そのことをここで教えられたのです。「新しく生まれ変わること」、そのことについて「御霊によって生まれた者」と言います。聖霊なる神が私たちを救いへと導いてくださるということです。皆さんもきっと覚えておられるように、あなたが福音のメッセージを聞いたときに同じメッセージを何回も聞いたかもしれませんが、あるときにそのメッセージが本当に自分のことを語っていると、そのことに気付いた時があるはずです。自分の罪深さが分かって、自分は本当に神の前に悔い改めてこの救いに与りたいとそのようにあなたが思ったのは、何回もあなたが話を聞いたからではないし、あなたに話してくれた人が大変雄弁であなたをそのように納得させてくれたからでもありません。聖霊なる神がそのことを明らかにしてくれたからあなたは救いに与ったのです。

イエスが言われたように、ヨハネ 16 : 8「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」と、自分が間違っていることを悟らせてくれるのは聖霊であるし、救いが必要だということを悟らせてくれるのも聖霊である。しかも、救いへと導いてくださるのも聖霊だと言うのです。このようにあなたを救いへと導いてくれる聖霊があなたのうちに内住してくれると、先ほど見たヨハネ 14 : 17がそのことを教えています。「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにられるからです。」と。

クリスチャンの皆さん、聖霊なる神はあなたのうちに内住、住んでいるのです。あなたを聖霊なる神の住まいとしておられるということです。これが救いなのです。ですから、もし、あなたのうちに聖霊が住んでいないなら、あなたは救いに与っていないということです。パウロはローマ書 8 : 9で「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。」と語っています。

ですから、聖霊なる神はどんな働きをするのか？まず「救いへと導く」のです。その働きによってあなたは救いへと導かれたのです。

2) 真理を教える

聖霊なる神はまた「真理を教えて」くれます。先に見たヨハネ 14 : 17には「その方は、真理の御霊です。」と書かれています。「世はその方を見もせず、知りもしないからです。」と続きます。だから、私たちはこの神のことばを通して記されている神の真理を知ることができるのです、理解できるのです。それを助けてくれる聖霊がいるからです。そのことを通して私たちは、私たちが知るべきこと大切なことを初めて知ることになったのです。イエスを信じることによって聖霊なる神をいただいたことによって、私が何のために生きているのか、人生の目的についても存在の理由についても、どうすればこの心を満たすことができるのか、どうすれば本当の満足を得て歩むことができるのかなど、私たちが長年持っていた疑問を、聖書を通して聖霊なる神が私たちに教えてくれるのです。

ですから、イエスはヨハネ 14 : 26で「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」と言われました。聖霊がなければ神が教えてくださった真理を私たちは深く理解することができないのです。ヨハネ 16 : 13にも「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」とある通りです。だから、恐らく、イエスを信じた皆さんが自分の信仰を振り返ったときに、イエスを信じた後聖書への理解が深まって来た、聖書が言っていることを理解できるようになって来た、そのようなことを経験されたかと思います。神がそのようにして助けてくださるからです。そのような働きを実は聖霊はするのです。救いに導くだけではない。あなたにこの真理を教えてくれるのです。

3) 霊的賜物を与える

先に見た通り I コリント 12 : 11に「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。」とあります。この「霊的賜物」と呼ばれているものは、イエスを信じたときにすべてのクリスチャンに神が与えてくださるものです。ということは、あなたが持って生まれた才能とは違うということです。神はそれをもお用いになることがあります。霊的賜物というのは、信じた後、聖霊があなたに与えてくれるものです。なぜなら、この「霊的賜物」というのは群れ全体の成長のために神があなたに与えてくださるものだからです。

I コリント 12 : 7に「しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と書かれています。才能というのは個人に与えられているもので、それぞれが自分で使って自分の益になるものです。音楽的才能、スポーツの才能かもしれません。でも、霊的賜物というのはそれをあなたが用いることによってあなただけでなくあなたの周りの者、群れがそれによって成長していくのです。

ですから、神が靈的賜物をクリスチャンに与えるのは、それをあなたが使うことによって群れ全体が成長していくようにと、その目的で賜物が与えられているのです。クリスチャンたちの教化のために靈的賜物が与えられたのです。ですから、御霊の賜物を与えられていないクリスチャンはいないのです。クリスチャンであればみな御霊の賜物をいただいているのです。でも、それをあなたが用いないとするなら、主からいただいた特権を台無しにしているということです。神がくださったものを使わないで神に仕えていないなら、神のみこころに沿って生きていないということです。

私たち信仰者が覚えなければいけないのは「神さま、どうか私を使ってください」です。確かに、多くの人たちが忙しい日々を過ごしています。でも、私たち信仰者は、もし、神に使っていただきたいとするならば「神さま、確かに忙しいです。でも、あなたに仕えたいです。人間的に言えばそれを神のために取れば生活にしわ寄せが出て来ます。でも神さま、あなたの助けによって、その短い時間で短縮された時間で為すべきことがしっかりできるように助けてください。」と、そのようにして私たちは神を第一として、そして、喜んで神にすべてをささげて仕えて行こうとするのです。皆さん、もし、そのような歩みをしていなければ、あなたの後について来る人たちはみな同じような生き方をします。

みことばが私たちに教えてくれることは、私たちは神からそれぞれ特別の賜物をいただいているから「それを使いなさい」ということです。使うために神がくださったのです。だから、群れの中に必要とされない人はいないのです。みなが重要でみな必要なのです。皆がそれを使うことによって皆が成長するからです。

4) 証の力を与える

四つ目は「証の力を与える」ということです。イエスはヨハネ15：26で「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」と言われました。聖霊なる神はイエス・キリストの証をすると言うのです。思い出していただきたいのは、初代教会にあって、パウロは別格として、ペテロ、ヨハネ、彼らは漁師でした。彼らに必要なだったのは学問ではなく経験でした。ですから、すばらしい漁師だったのでしょうか。でも、イエス・キリストの救いに与った彼らはどうだったか？彼らはエルサレムの町にあって大變勇敢にイエス・キリストを証したわけです。みことばが教えるのは「ペテロとヨハネの大胆さを人々は見た」です。しかも、彼らは無学でした。普通の人でした。教育も受けていない。特別な宗教的な教育を受けていなかったのです。今で言えば神学校、バイブルカレッジという所に行っていない。

でも、神は彼らを大胆に用いたのです。なぜか？みことばが教えています。使徒の働き4：13「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」と。彼らではなかった、神が彼らを使ってみわざを為したのです。彼らが大胆だったのは、神が彼らにそのような大胆さをお与えになったからです。

イエスはマルコ13：11で「彼らに捕らえられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話さない。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」と言っておられます。ですから、私たちがみごとに上手く伝道できるかどうかなどと心配しないでいい、ちゃんと神が語るべきことばをくれるからということです。みことばが教えたように聖霊があなたを通して語ってくださるのです。ですから、証をする力は神にあるのです。聖霊があなたを通して証を為してください。その働きを実際に主ご自身が成して来られたのです。

聖霊なる神の働きというのは、私たちに救いへと導き、真理を教え、我々に靈的賜物を与え、そして、私たちの証に力をくれると、そのように見て来ました。

5) 主に似た者へと変える

5番目は「私たちに主に似た者へと変える」働きです。ガラテヤ5：16、24-25をご覧ください。「:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」「:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。:25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」

私たちは栄光から栄光へと主と同じ姿に変えられていきます。その働きをするのは私たちのうちに内住しておられる聖霊なる神の働きであると、Ⅱコリント3：18で教えています。「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」、ですから、あなたに内住する聖霊はあなたを日々イエスに似た者へと変えていこうとします。その働きを始めてくださったのです。イエスにお会いするときに私たちは完全に変えられるのですが、そのときまで内住する聖霊がそのような働きをあなたのうちで行ない続けてくださるのです。だから皆さん、罪から離れることです。主に喜んで従うことです。

6) 特別な任務に召される

6番目に聖霊なる神の働きは「特別な任務にある人たちを召す」ということです。「使徒の働き」にはよいよ世界宣教が始まっていこうとする様子が書かれています。人々はアンテオケに集まっています。今のシリアです。使徒13:2に「:2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。」と、このように聖霊がそこに集まっているクリスチャンたちに働くのです。3-4「:3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。:4 ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。」と、こうして世界宣教が始まっていくのです。

救いに与ったことはすばらしい感謝なことです。ひとり一人に特別な賜物が与えられていることも感謝なことです。神はご自身の栄光のために私たち一人ひとりを教会の中で用いてくださる。でも同時に、神は特別な召しを特別な人々に与えるということも書かれています。牧師たちや宣教師たち、そのような働き人です。私たちの問題はその召しに対して忠実に従うかどうかです。どんなことがあっても、その主の召しを信じて従っていくかどうかです。でも、確かにこのような働きを聖霊は為すと言います。

7) みこころのままに導く

聖霊なる神はみこころに沿って人々を導いていかれるということ。聖霊はあなたをみこころに沿って導いていってくれるのです。パウロたちの宣教で第二次宣教旅行があります。このときにパウロたちはシリアのアンテオケから旅立ちます。今のトルコです。そして、そのトルコを東から西へ横断して行きます。この第二次宣教旅行のときに起こったことが記されています。使徒の働き16:6-8にこのように記されています。「:6 それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、…」とあります。つまり、彼らは神のみことばを語るためにずっと西の方へと旅をして行くのです。すると、聖霊が「アジアの方に行ってはいけない」と、アジアとは今のアジアではありません。トルコのある一部で、南西に位置する地域のことをアジアと呼んでいたのです。「そこに行くな」と言われました。そこで彼らは「フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。」と、南部を通らずにトルコの真ん中あたりを通って行くのです。「:7 こうしてムシヤに面した所に来たとき、」とほとんど西の果てですが、パウロたちはそこから北に向かおうとします。「ビテニヤのほうに行こうとしたが、」ビテニヤは北にあります。そこで「イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」、つまり、聖霊が「そこに行くな」と彼らを止めるのです。「:8 それでムシヤを通して、トロアスに下った。」と、ムシヤからもっと西へ出てトロアスへと移動するのです。この後、彼らはトロアスからヨーロッパの方へと出て行くのです。

つまり、この箇所が教えていることは、聖霊はこのように私たち一人ひとりを、あなたを導いてくれるということ。生きておられる神は、あなたをちゃんとみこころに沿って導いてくれるのです。ときには扉を開いてくれたり、ときには扉を閉じたりと、様々な方法で神はあなたを導いてくれます。もし、あなたが喜んでみこころに従うならば…です。私たちの戦いはみこころに従うのか、自分のやりたいことをするのかです。でも確かに、パウロたちはみこころに従うことを決心してそのように生きていました。その彼らを聖霊はみこころのままに導かれたのです。

このことを考えるときに皆さん、エキサイトして来ませんか！私たちの生活はこのように神が導いてくれるのです。私たちの神は生きておられます。その神がちゃんとあなたを導いていってくれる。これからどうなっていくのか、私たちはそのことを考えるだけで非常にエキサイトして来ます。なぜなら、すべて神の御手のうちにあるからです。神がこうして私たちに導きを与えてくださり、そのみこころに沿って私たちを用いてくださるのです。パウロたちはそのようにして生きたのです。そして、聖霊なる神はご自身のみこころに沿って人々を導いていかれるのです。

8) 励ましを与える

聖霊は励ましを与えます。使徒9:31「こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」、聖霊が人々を励ましたのです。あなたにもそれが必要かもしれません。でも感謝なことに、聖霊なる神の働きの一つは私たちを励ましてくれることです。

9) 悪を止める

最後に、罪を留めるという働きがあります。どういうことか？今の世の中は悪に溢れています。でも、これ以上悪が横行しないように聖霊が留めているのです。でも、聖霊なる神のその働きが止んだときに何が起こるのか？世の中は今よりももっと酷い悪に溢れた世界となっていきます。患難時代にそれが起こります。今はそのようにならないようにと聖霊なる神がそのように働いておられるのです。

Ⅱテサロニケ2:6「あなたがたが知っているとおり、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあるのです。」、偽キリストが出て来ます。私たちの想像を超えるような悪を行うのです。でも、今それを引き止めている、だれが？聖霊なる神です。

さて、今、ざっと見て来ましたが、これだけがすべてではありません。これは聖霊なる神の働きの一

部です。少なくとも、皆さんに見ていただきたかったのは、このような聖霊なる神がもうあなたのうちに内住しておられるということです。もう一度、ヨハネ 14 : 16に戻ってください。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」と。

＝ 助け主 ＝

見ていただきたいのは「助け主」ということばです。これは二つのことばからできています。一つは「傍らに、あなたの傍に」で、もう一つは「呼ぶ」ということばです。新約聖書の新改訳も口語訳も文語訳もみな「助け主」と訳しています。少し悲しかったのは、共同訳、新共同訳は「弁護者」と訳しています。そういう意味のあることばでもあるのですが、ここで特に主が言われたかったことは、文脈からイエスがいなくなってしまう、いっしょに生活していた主がいなくなってしまうと、大変な不安に駆られた弟子たち、その弟子たちをイエスが励ましてくださったのです。「心配しなくていい。わたしはあなたがたの傍らに、すぐ側に、あなたがたのうちにあなたを助けてくれる助け主を送ってあげる。」ということと言われたのです。

私たちはもうすでに私を助けるための助け主をいただいているのです。聖霊なる神をいただいたのです。あなたを助けてくれるのです。あなたが神に喜ばれる歩みを為していくためにこの助け主が助けてくれるのです。あなたが神の栄光を現わすために必要なことを神がちゃんと助けてくれるのです。あなたに必要な助けを与える方があなたの傍りにいてくれるのです。これはあなたのすべてを知っている神が、あなたに一番必要だとして与えてくれたのです。

私たちがクリスチャンとして主に喜ばれる歩みを為していくために二つのことを是非覚えてください。

* キリスト者として主に喜ばれる歩みをするための二つの秘訣

1. 助け主の助けをいただきながら歩む

助け主が与えられたのは、その助けをいただきながら生きることが必要だからです。ですから、私たちはこの神に対して「主よ、どうか私を助けてください。あなたに喜ばれることを為すために、あなたが喜ばれることを語るために、あなたが喜ばれることを考えるために、あなたが喜ばれるように生きていくためにどうか私を助けてください。」と、この助けを仰ぎながら私たちは生きるのです。

パウロが言った通りです。ピリピ 4 : 13 「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」、私を強くしてくださる方が助けてくださらなければどんなこともできないのです。主のみこころに従って行く、主を喜ばせて行く、そんなことは私たちの意志ではできないのです。神の助けによってできるのです。主のみこころに従う、みことばに従う、私たちにはできません。主なる神の助けによって可能なのです。だから、備えられた助けをいつも仰ぎながら歩むことです。

2. 助け主にすべてを明け渡して歩む

私たちによって必要なのは、助け主を仰ぎ見て助けを求めながら生きることだけではないのです。「主よ、私のすべてをあなたにお委ねします」と、「助け主にすべてを明け渡して歩む」ことです。パウロはエペソ 5 : 18 で「…御霊に満たされなさい。」と言いました。自分のすべてをこの方に明け渡し、主の導きを信じその導きを求めながら生きていくのです。なぜなら、主だけが何があなたにとって最善なのかをご存じだからです。

クリスチャンの皆さん、感謝です！神に喜ばれる歩みをあなたが為すことを神は可能にしてくれるのです。どうすれば良いのか、この神にあなたのすべてを委ね続けることです。そうすると、必ず出て来る抵抗は「私のやりたいこと」です。私の勝手な思い、私の夢です。でも、あなたが神の栄光を現わすためには「神の最善」を求めなければいけません。だから、そのために私たちの思いのすべてを委ねるのです。「主よ、あなただけが最善をご存じです」と、そして、神の最善が為されるときに神の栄光が現わされるだけでなく、私自身も神の喜びで満たされるのです。だから、「そのように生きていきたい。神さま、私のすべてをあなたにお委ねします。」と言うのです。パウロが言う通り、ガラテヤ 5 : 16 「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」と。私たちクリスチャンに必要なことは「神の助けを仰ぎながら生きる」こと、そして、「私のすべてを神にお委ねして「主よ、どうかあなたのみこころになりますように」と、そのことを願いながら生きていくことです。

ダラス神学校の創設者であり初代の学長でもあったルイス・スペリー・シェイファー先生はその神学書の中でこのように言うおられます。「自分を神に全く明け渡すことは、ある特定の問題に関してではなく、自分の人生のすべての点で神のみこころを受け入れることである。従って、それは神が信者にさせたいと望まれていることなら何でも進んですということなのである。」と。自分のやりたいことをしていこうとするのか、それとも神があなたに「せよ」ということを行っていこうとするのか？その行き着く所に神の祝福が有るかないか、神が喜ばれるかどうかです。この神にすべてを明け渡して生きてい

くことができる、そういう人へと私たちは生まれ変わったのです。そして、それが主が私たちに求めておられる生き方です。

聖霊なる神をくださった神はこの方にすべてを委ねて生きなさい、この方にいつも助けを求めて生きていきなさいと言われます。なぜなら、この方はあなたのために与えられたからです。あなたを助けるために！こんな新しい人生を私たちは歩み始めたのです。「クリスチャン」という人生です。「キリストの奴隷」という人生です。聖霊なる神を私たちは喜びながら感謝しながら、この方の導きに従っていくことです。

どうか、そのように歩んでいただいて、そして、ごいっしょに神の栄光を現し続けていきましょう。